

ドイツ語初級文法記述再考（1）

—話法の助動詞を手がかりに—

Eine Revision der deutschen Grammatikbeschreibungen für Anfänger (1)
— Anhand der Modalverben —

宮 永 義 夫

Yoshio MIYANAGA

ドイツ語初級文法記述再考 (1)

— 話法の助動詞を手がかりに —

Eine Revision der deutschen Grammatikbeschreibungen für Anfänger (1) — Anhand der Modalverben —

宮 永 義 夫

Yoshio MIYANAGA

1. 何を再考するのか

文法記述は文法現象を過不足なく説明出来ればよい。しかし、本質が抜け落ちてしまうことがある。本質とは、より根源的な説明ということである。広い連関を持つ説明が言語理解にも必要である。例えば現在分詞の説明として多数派は、不定詞 +d、ただし、*seiend*、*tuend* となる。現在分詞の形として、区別する必要があるのは、標準的な大多数である *machend* のようなタイプと、*handelnd*、*wandernd* などの *-elnd*、*-ernd* タイプ、そして例外としての *seiend* 及び *tuend* である。例外はわずか 2 例であり、その他を単純な説明で網羅している、非常に優れた記述だと言える。しかし、多少考察すれば、不定詞の語尾は *-eln*、*-ern*、*sein*、*tun* が共通して *-n* であり、その他は *-en* である。その点に注目すれば、現在分詞と不定詞では分類が異なっている。*sein* では不定詞語尾 *-n* が取れ、現在分詞語尾 *-end* が付加されている。不定詞に *-d* を付加すると捉えるならば、*seiend* になるはずであって、だからこそ、*seiend* は例外なのであるが、何故に、*e* が付加されるのか理解されない。

標準形の *machend* なども *machen+d* ではなく、*mach+end* と捉えられる。反対に *-elnd* 型、*-ernd* 型では何故 *e* が付加されないかの説明はより簡単である。曖昧母音の連続を嫌うというドイツ語に広く見られる現象をもって説明とするのである。記述全体を振り返れば、現在分詞の形は、不定詞の語幹 + *end*、ただし、*-eln* 型、*-ern* 型は、*-elnd*、*-ernd* と説明される。これは、例外該当数を増やし、記述としては後退しているようにも見えるが、より本質的なものである。初級文法の記述をこのような観点から、様々な分野において「再考」して行きたい。

不定詞 +d よりも不定詞の語幹 + *end* のほうが本質に近い理由は、*-eln* 型、*-ern* 型における *e* の省略を通して、「口調の *e*」の包括的理解へと至る道が開けるからである。一般に人称変化における「口調の *e*」は、語幹末が *-t*、*-d*、あるいは、多少細かい説明を用意する教科書では、語幹末が *-m* あるいは *-n* であって、その前が *l*、*r* 以外の場合に、発音上「口調の *e*」が必要とされる。これを裏から言えば、*-eln* 型、*-ern* 型の不定詞、1 人称 3 人称複数の定動詞の語尾が *-n* であるのは、前が *l*、*r* だからである。更に、例外たる *sein*、*tun* も発音が可能であるから、語尾は *-n* なのである。ということは、実は標準の不定詞、1・3 人称複数の人称語尾 *-en* に含まれる *e* も「口調の *e*」であると言える。語幹末が母音である *gehen*、*sehen* なども、本来は *sehn*、*gehn* で構わない筈であるが、同化している。残った例外が *sein* と *tun* なのである。また、*sagen*、*reden* なども本来、*sage-n*、*rede-n* である可能性があるが、*sag-en*、*red-en* に組み替えられ、*sagen* に「口調の *e*」は不必要であり、*reden* には、語幹末が *d* であることから「口調の *e*」が必要とされる。

根本には鳴音の順序がある。音節末側においては r が最も母音に近い位置を占め、次に l、鼻音は終端に来て、m と n は並び立たない。ただし、bewillkommen のような例があるから、あえて言えば、r-l-m-n の順序に並ぶということは言える。rn や lm の並びである lernen や filmen では -n の所以外では「口調の e」が不必要であるが、それ以外の組み合わせである rechnen や atmen では全てに「口調の e」が必要となる。

現在分詞の語尾 -end の e は曖昧母音ではあるが、「口調の e」ではない。曖昧母音の重複の場合に限って省略される。即ち、語尾は -end となるか、-elnd、-ernd となるかのいずれかである。まったく同じことが、複数形語尾の -(e)n に見られる。たとえ語幹側が母音であっても、Frauen となり、e を落とさない。つまり、n 型複数形も、-en であるか、-eln、-ern になる。曖昧母音は全て「口調の e」であるという記述もあり得るが、曖昧母音とは「子音の音節化」あるいは「音節化した子音」であって、「口調の e」とは、条件によって音節化せざるを得ない時に出現する曖昧母音だと捉えるのが適切である。

この発想を動詞の人称変化全体へ拡張する。曖昧母音を用いるのは、1 人称単数 -e と不定詞及び 1 人称複数と 3 人称複数の -en である。この内、不定詞及び 1・3 人称複数の語尾の本質は -n であって、音節化せざるを得ない場合が多く、-en となる。従ってこれは「口調の e」である。とは言っても gehen、sehen のように、語幹が母音終端であるものも、同化して -en になっており、n 型複数形と同じ表現型になっている。sein、tun は例外の範疇に入る。語幹母音終端型においては「口調の e」ではない「子音の音節化」であるという説明をするか、歴史的経緯から、例えば h (ch) 音に代表される子音の消滅などによって説明をするという面倒な手続きを取るということも、「本質から」という理念によって正当化される。sein、tun の現在分詞が seiend、tuend であることから、不定詞においては -n が本来であり、現在分詞においては -end が本来であるという点から出発せざるを得ない。

一方、1 人称単数の -e は、発音上の必要があって「子音の音節化」が起こっているわけではない。それでも「子音の音節化」は「完全な音節」とは一線を画する。曖昧母音の語尾は語幹の延長上にある。動詞には語幹のみの「語尾無し形」の活用がある。即ち直説法過去、1・3 人称単数形及び命令法 2 人称単数形である。「子音の音節化」には、音韻上要求される、いわゆる「口調の e」と文法機能上の弁別要素としてのそれがあることになる。「子音の音節化」の一部は確かに、単に -e を付加することを意味するが、命令法 2 人称単数、強変化動詞の直説法過去 1・3 人称単数の語幹形に対して、直説法現在 1 人称単数、弱変化及び混合変化動詞の直説法過去 1・3 人称単数、接続法 1・3 人称単数が語幹末子音の音節化、即ち -e が付加されて、区別される。個々に -e を使った活用があるのではなく、「子音の音節化」という一つの形式があり、それはまた非音節化の形式とペアになっている。このように捉えることで、より深い認識へ至る記述が可能になる。

語幹形の強変化直説法過去 1・3 人称単数と命令法 2 人称単数が最も基本的であるとは言えないが、子音接尾辞を持たないものとしては、直説法現在 1 人称単数が加わり、こちらが語幹末子音の音節化を伴って弁別化が図られている。人称変化は、直説法現在において存在する 1 人称単数と 3 人称単数の区別が、直説法過去や接続法では失われているという特徴を有する。そこに本質があり、話法の助動詞の考察へも繋がる点がある。

2. 形式から見た話法の助動詞

話法の助動詞は、言うまでもなく、Präteritopräsens「過去現在人称変化動詞」形式を代表するものである。「過去形」は1人称単数と3人称単数が同形であって、更に、強変化においては語幹形が登場する。「口調のe」を含む-eの付加を「子音の音節化」として統合的に捉えることが出来る。「口調のe」ではない、弁別的な「子音の音節化」があるのは、直説法現在1人称単数、弱変化直説法過去1・3人称過去、接続法である。これらが集合して一つのグループを作ると考えることが出来る。また、一般の現在形人称変化においては、不定詞及び1・3人称複数、1人称単数、2人称単数、3人称単数及び2人称複数、の4種が区別され、直説法過去並びに接続法では、1・3人称単数、2人称単数、1・3人称複数、2人称複数の4種となる。現実との距離感が遠いと言われる後者では、単数／複数の分かれ目の他に、はっきりと1・3人称／2人称の切れ目が見える。それがはっきりしないのが直説法現在形であって、そのことによって、直説法現在と直説法過去・接続法が分断されるのである。

話法の助動詞そのものから若干遠ざかるが、「弁別要素」としての「子音の音節化」は、弱変化における過去形人称変化と過去分詞の形式を見ると認識が進む。根源的動詞である強変化動詞は、幹母音を中心とした音韻の違いを弁別要素とする母音交替（アプラウト）型変化であるが、何らかの語彙要素を材料として動詞化された弱変化動詞は語尾付加型変化である。具体的には歯音付加と呼ばれるものである。英語を参考にすると、いわゆる弱変化動詞（規則動詞）は標準的に-edが付加されるが、重要なことは、過去形と過去分詞は同形である。過去形と過去分詞は同一のものであって、場合によって、ある時は動詞として、ある時は形容詞的に、分詞として用いられると把握することも出来る。ところが、ドイツ語では過去基本形は語幹+te、過去分詞は(ge)+語幹+tと言う。過去形に-eを付けるのは、+teとすることで強変化の語幹型と対応し、子音語尾変化が統一されるからである。しかし更に根本的に見れば、過去形を作る語尾と過去分詞を作る語尾は同じであって、例えば説明の一つとしては、英語の-edはドイツ語では-tであるという言い方になる。

それではなぜドイツ語の過去形には-eが付くのか。弁別のためである。-tは既に多くの所に分布する。たとえ語源、由来を異にしているも、同一形になってしまっている。もし、過去形も本来そうであったかもしれない-tであると、直説法現在3人称単数、現在2人称複数、過去1人称単数、過去3人称単数が同形となる。特に3人称単数において、現在と過去が同一になることは忌避されるであろう。直説法1人称現在の-eも本来は完全な母音語尾であったと考えられるが、曖昧母音化した現在では、やはり弁別化の機能を持つに過ぎない。音節化していなければ語幹形であって、それは命令法2人称単数に他ならない。裸の語幹形が命令形となることが、ゲルマン語の特徴であって、同様に語幹形に縮約してしまった直説法1人称現在形は、人称代名詞の発達と共に、音節化することによって、いわば馴化されて直説法になる。

助動詞が過去形の性質を持つことが全ての原点であるが、まず、現在形変化と、接続法を含む過去形変化の相違について確認をすることが重要と思われる。ゲルマン語では現象の流れを、大きく現在形と過去形に二分して捉えている。現在は絶えず移りゆく時の流れを分ける「点」であって、ある事象を表現するドイツ語の上の現在形は、①まだ開始していない、未来に属する事象、②過去のある時点に開始され、まだ終了していない事象、③現時点では起こっていないが、過去に（繰り返し）起こり、未来においても（繰り返し）起こる（であろう）事象、を表現する形式であるが、現時点は絶えず移動する点であって、事象は時間の経過（流れ）を必要とするので、現在形は、直前の事柄の短期的な記

憶を残しながら絶えず未来へと移動する現時点を追いかけているので、直前を開始点とする未来志向、過去形は、現時点を最終点とし、過去の任意点を、現時点に代わる基準点にすることができる過去志向とすることができる。現在形 (未来形) は必ず思考の主体である 1 人称単数 *ich* から出発する。世界は内面と外界から成り立っており、3 人称の中から、特定の関係を取り結ぶ 2 人称が立ち上がってくる。

過去形の世界では、対象として 1 人称単数が存在する。現在形にも対象としての 1 人称単数はあり得るが、言語表出の主体と一致する存在としてである。Ich bin Student. においては、主語 *ich* は対象としての *ich* であるが、この発話を為している主体を指している。過去形の Ich war Student. では、過去形の用法から言えば、現在とは無関係であることが機能上含まれていることになる。ということは、この表現によっては、Ich bin Student. が真であるか偽であるかは関知していない。従って真である可能性を排除しない。それは表現に含まれる *ich* が発話の主体と同一である可能性を排除しないという意味ではあるが、言語上保証しているのは、「かつての私」、即ち発話主体とは異なる、対象としての *ich* についてである。現在形の 1 人称は発話行為そのものの表出という機能があるが、過去形は全て表出されたものに属する。

念のため付け加えれば、人称代名詞の複数とは名詞の複数とは性質が異なる。発話者は「私」一人であって、同質のものが複数あるわけではない。言語上、1 人称複数とは、主に 1 人称単数 + 2 人称単数・複数であるか、1 人称単数 + 3 人称単数・複数である。3 人称複数については、各個別要素が全く同等のものであるか、あるいは差が存在するのかの違いがあり、差のあり方の違いは限りなくあることになる。その差のあり方の中から 2 人称が立ち現れ、2 人称複数の場合、同等 2 人称複数、2 人称単数 / 同等・有差 2 人称複数 + 3 人称単数 / 同等・有差 3 人称複数の場合が考えられる。

過去形型人称変化の場合、突出するのは 2 人称である。言語の表出があるとき、その源は 1 人称単数であるが、表出内容の外側にあって隠れている場合が多い。表出の内部にあって最も重要なのは、表出の宛先である 2 人称である。対象としての 1 人称は 3 人称と変わらず、人称変化はそれを象徴する。

そこで、1・3 人称単数、2 人称単数、1・3 人称複数、2 人称複数という非常にすっきりした組み合わせになる。不特定多数に最もよく対応するのは *-n* である。共通して、3 人称複数には *-n* になり、その不定性から、不定詞の語尾でもあり、強変化の過去分詞も、アプラウト型の独自の語幹を持ち、おそらくは不定形の一つとして、不定詞と共通の語尾を付けている。現在形型においても過去形型においても、最も根幹にあるのは語幹形であって、これは 1 人称単数が引き受けているのであるが、用法から言えば、過去形型は 1 人称単数も表出内容物として 3 人称単数へ接近しているのではあるが、形式からすれば、3 人称単数が 1 人称単数へ同化していると捉えると分かりやすい。現在形型においては、3 人称単数が 1 人称単数とは異なる特異性を持っていることで、*-t* が付く。2 人称は複数の場合に、3 人称性、あるいは不特定多数性を帯び、3 人称単数と同レベルの *-t* となり、発話行為の宛先である 2 人称単数が最も重く、特異な *-st* の語尾を取る。

現在形型の場合、語幹型は命令法である。それ故、1 人称単数は、語幹末子音の音節化、すなわち曖昧母音 *-e* の付加は必須になる。一方、命令形においては、*-e* の付加は選択的である。過去形型変化は、その本質から言って、命令形を前提としない。そこで、1 人称単数の語幹末子音の音節化は必要としない。話法の助動詞が含まれる「過去現在人称変化動詞」も、本来は過去形が基であるから、命令形を持たない。しかし、意味上は命令を作ることが出来る。

新たな用法が付加される時に選択される形式が最も根本的、標準的なものであると言うことができる。話法の助動詞の中で命令形を形成するに至ったものは、小学館『独和大辞典』によれば、*müssen*、*wollen* である¹⁾。もう一つの「過去現在人称変化動詞」である *wissen* も当然命令形を持つ。命令法は2人称のみが該当するが、複数形は直説法現在と同形であり、特殊な形を持つのは単数形である。前述のように、命令法単数は語幹形である。『独和大辞典』が採用した命令形は *müsse*、*wolle*、*wisse* であり、いずれも *-e* を伴っている。

『独和大辞典』は、不規則動詞変化表に記載されているものに限れば、上の3例以外はことごとく、*-e* を自由選択としている。教科書に多く見られる書き方では、「口調の *e*」を伴うものは、命令形においても *e* を用いる方を選択している。*rechnen* 型のように音節化を必要とするものは、*e* は必須であるが、*-t* / *-d* 型は音節化の必要はない。それにも関わらず、*arbeit*、*wart* ではなく *arbeite*、*warte* を選ばせるのは、理由があることである。あくまでも自由な選択ではあるが、*arbeit* では、名詞と同形であり、動詞性をもたらす差異は *e* によって得られる。更に広範囲に及ぶ問題は、まさに語幹末が *-t* / *-d* であることから生じる。音としては /t/ であり、変化語尾と重なるのである。*warten* の語幹である *wart* の音は綴りでは *warrt* でもあり得る。同じ発音の *warrt* は何の変化形であり得るか。例えば不定詞が *warren* である動詞の直接法3人称現在、あるいは2人称複数である。ということは命令形複数である。*-t* / *-d* 型は2人称複数の人称変化との差別化のために *e* を伴うということが言える。

過去現在人称変化動詞の命令形は独自の形をしている。語幹は *müss*、*woll*、*wiss* で、いずれも命令形単数として差し支えない筈であるが、避けられている。不都合は、話法の助動詞の由来に求めることが出来る。*müssen* や *können* が典型的であるが、不定詞及び複数形がウムラウトなどを備えて特殊な形をしている。即ち、語幹形などを持つ単数形が本来の形であり、不定詞はそこから派生したものである。また、過去現在人称変化動詞は過去形単数と過去形複数の区別を保持している。語幹は *muss*、*will*、*weiß* が本来であるが、過去語幹というべきもので、命令にはならない、一方、不定詞・複数形は語幹形がない。その間の妥協の産物が、末尾子音の音節化であり、*-e* を伴う命令形である。

3. 叙法と話法

中山豊『中級ドイツ文法』の記述では、文は客観的な叙述内容と主観的な叙法要素で構成され、叙法要素は更に、判断要素、心情表出要素、談話構成要素に分類されている²⁾。叙法要素に関わる形式として、定動詞の法、話法の助動詞、不変化詞を挙げてある。話法の助動詞は叙法の助動詞と称しても差し支えないと思われるが、当該書は話法については特に説明を加えていない。動詞の法も含めて、いずれも *Modalität* に関係しているが、用語を再考すれば、新たな認識を得られるものと思われる。

「話法」として外国語学習者が最初に出会うのは、「直接話法」「間接話法」である。ドイツ語の「話法の助動詞」の「話法」は、それとは異なるものと言うことはできない。ドイツ語において、「話法」はどのように現れるか。『中級ドイツ文法』では、接続法の用法として、「要求話法」「仮定話法」「間接話法」を挙げる。更に「仮定話法」のヴァリエーションとして「否定話法」「外交（婉曲）話法」がある。そして「直接話法」「間接話法」に並んで「体験話法」が登場する³⁾。これらは「引用形式」あるいは「引用話法」といった上位概念を用意することもできるであろう。「直接話法」と「体験話法」は接続法からは離れる。ということは、一般的な用語の使用例ではないが、例えば、「直接話法」は直説法の話法ということもできる。

「法」は動詞活用の形式である。その中に含まれる用法が「話法」ということになろう。「話法の助動詞」とは、その「用法」に対応する名称だと言える。名詞系列でたとえて言えば、4つの格体系が「法」であり、それぞれの格の用法が「話法」に当たる。4つの格で用法が間に合わなくなると前置詞の登場となる。一つ一つの前置詞が話法の助動詞に当たり、前置詞の格支配がいわば助動詞の法であるが、それぞれの前置詞が固有の格のような働きをしていることを助動詞でたとえれば、6つの話法の助動詞は6つの固有の話法、即ち *müssen* は *müssen* 話法のようなものである。

話法の助動詞の具体的な用法について、『中級ドイツ語』は、それぞれ固有の意味(用法)と陳述緩和的意味(用法)に分けている⁴⁾。特に後者が「叙法」に関係してくる。文の構成要素を見ると、あくまでも言語行為内の要素を問題としているから、語(語彙)としての形式を備える要素を対象としている。そのことに限定すれば、文は独立的要素としては動詞、名詞、副詞の3種で出来ている。動詞は人称変化(活用)するものであり、名詞は性数格変化(曲用)するもので、その他は、本来ならば様々な分類されるべきものであるが、不変化詞=副詞と纏められる。(定)動詞は文の中に唯一だけ存在するもので、他の要素は動詞と結び付くことで存在している。文内部の部分結合には節と句がある。節と句になるものは、名詞と副詞以外に名詞を拡大する要素、形容詞(修飾、付加)が可能である。節は、いわゆる従属接続詞+文の形を取って動詞以外、即ち名詞、副詞、形容詞として働くものである。

副詞は名詞以外を修飾するものである。従って、形容詞や他の副詞を修飾すれば、形容詞句/節、副詞句/節に含まれてしまう。定動詞を修飾することは、即ち文を構成する要素となるので、文成分(直接構成要素)にカウントされる。文は主語(主部)と述語(述部)で構成されている。文成分である副詞は動詞を修飾するという言い方にはなるものの、名詞句・節の様態である、例えば目的語として動詞と繋がるという形とは違うということだけを意味しており、形容詞が名詞を修飾して、より大きな名詞句を作るように、動詞句とか、句が作れないとすれば、動詞核とでもいうようなものを作る様態にはならない。実はこの制約が、英語の *stand up* のような句動詞と同じ成り立ちを持つドイツ語の *aufstehen* を、ここに見る姿、即ち分離動詞という形式を取らせる要因になっていると思われる。動詞本体のみを修飾していると捉えられる場合は、語修飾(動詞修飾)の副詞と呼ばれるが、動詞は一方で目的語等と連結しているので、副詞の修飾範囲は容易には決めがたい。これは目的語の性質にも左右されることであるが、例えば、*Er spielt gut Klavier.* の場合、*gut* が純粋に *spielen* だけを修飾できるかは疑問である。文から主語を取り除いた、即ち述語は、不定詞句と等しい。不定詞 *spielen* は目的語 *Klavier* と副詞 *gut* と結んで不定詞句を作るが、一般的には名詞(句)が不定詞と緊密に繋がり、語順も *gut Klavier spielen* である。これはシンプルに *gut (Klavier spielen)* であって、*gut* は *Klavier spielen* という核の不定詞句を修飾している。*Klavier gut spielen* となれば *Klavier (gut spielen)* であって、*gut spielen* が核の不定詞句となる。この文例では無理があるが、あり得ないことではない。このような構造を持つものが分離動詞に他ならない。そしてそれは句にはならず、語に縮約される傾向を持っていると言うことを物語っている。

構造ないし様態においては、上記、語修飾副詞と何ら変わるところがないが、主語まで含めた、文の残り全てを包括して修飾する副詞も存在する。文修飾副詞あるいは文副詞と呼ばれるものである。上の例文の *gut* を *bestimmt* に替えれば、たちまち構造が変わる。*Er spielt bestimmt Klavier.* この場合、*bestimmt* は *Klavier spielen* を修飾するのではなく、主語も含めた、節に書き換えられる、*dass er Klavier spielt* を修飾している。中山は前掲書で、文副詞を叙法要素として、その他に心態詞、焦点化副詞、文相当詞、談話信号を列挙している。文副詞をまた、真偽判断と価値判断に分類している⁵⁾。ここで紛らわしいのは、これらの語が叙法要素であると誤解されやすい。語の使用は必ず叙述内容を含むので

あって、同時に叙法を表示している。文の要素が叙法であって、文の性質を決める語の用法が話法、動詞類に備わっている文の性質を決める形式が法ということが出来るのではないか。

4. 話法の助動詞の特質

助動詞は、動詞を助けるというその名の通り、実は副詞に似た性質があるのではないか。一方由来は他動詞なのである。他動詞としては不定詞句を目的語とするものである。Klavier spielen を können の目的語と捉え、言わば Er kann [Klavier spielen]. のような構造となっているものを書き換えるとすれば、一例として Er hat die Fähigkeit, Klavier zu spielen. が考えられる。文全体の主語が残り、当然、zu 不定詞には主語はない。一方で、中山が「陳述緩和的用法」と呼ぶ用法であれば、言わば、(?)Es kann, dass er Klavier spielt. のような構造、言い換えれば、Es ist möglich, dass er Klavier spielt. は節が形成され、主語はその中にある。[主語+述語] の全体は文に他ならず、全体を修飾するものは「文副詞」である。

動詞活用要素の副詞的作用について考えるには、不定詞に固定された側から見ることも重要になる。不定詞は不定詞句として文の構成要素になる。これは即ち、名詞、副詞、形容詞のいずれかになることである。しかし「動詞的用法」とされるものがある。『中級ドイツ文法』には Er verspricht ein großer Künstler zu werden. 「彼は偉大な芸術家になりそうだ。」や Es begann zu regnen. 「雨が降り始めた。」が挙げられている⁶⁾。これらを不定詞句にすると、ein großer Künstler zu werden versprechen、zu regnen beginnen となるが、いずれも全体の主語が外側の最終不定詞ばかりではなく、内側の不定詞にも関与している。これは外側が助動詞として機能し、言わば内側の Modus を表している。

den Täter aus dem Haus gehen sehen のような知覚動詞の用法では⁷⁾、外側の sehen の目的語の Täter が、内側の gehen に対しては主語に転換しており、節からの転換や、形容詞用法などの構造の何らかの縮約を想定せざるを得ず、明らかに違う構造である。上の構造は、den Täter, der aus dem Haus geht,あるいは、dass der Täter aus dem Haus geht, に置き換えられるので、目的語+目的補語（形容詞）の様な構造、例えば、den Hut gut finden のようなものと似ている。面白いことに、一般動詞の不定詞用法では、原形不定詞は動詞的用法にはならず、zu 不定詞にあることである。zu 不定詞は、その構造から見て、本来は前置詞句であり、副詞的用法と形容詞的用法が根源的である。外側の動詞（不定詞）が副詞的な相貌を帯びるのは、相対的にその動詞本体の意味的比重を軽くする、あるいは同じことであるが、内側の（前置の）要素の意味を重くすることによって起こるのである。例えば機能動詞、eine Reise machen や、分離動詞、aufmachen なども同じ傾向から生じる。動詞の文法機能化である。

話法の助動詞の考察には、必ず叙法要素が関わっている。それは話者の判断等であるから、文の主語の如何にかかわらず、その発話を成立させている根源、即ち、1人称単数 ich が問題となる。このことは、話法の助動詞だけではなく、動詞全体に普遍的に該当することである。特に denken のような精神活動の動詞の場合は顕著である。話法の助動詞の理解の一助になる。人の「思考」を言う denken は ich denke ならば、「我思う」で、内面の表現であるが、外には見えない er denkt は、er sagt, ich denke という発言あるいは態度の描写であるか、彼の諸々の発言なり態度から帰納して判断しているのである。必ず話者の判断が関与している。主語の人称と話法、叙法は連動している。話法の助動詞はこのことが主題であるし、如何なる動詞もこれを含まざるを得ない。—続く—

註

- 1) 国松孝二 (編者代表) 『小学館独和大辞典』 第2版, pp2844-2853, 小学館, 2000.
- 2) 中山豊 『中級ドイツ文法—基礎から応用まで—』, p273, 白水社, 2008.
- 3) 前掲書, pp209-231.
- 4) 前掲書, pp87-92.
- 5) 前掲書, pp273-282.
- 6) 前掲書, pp106-108.
- 7) 前掲書, p104.